バイア海底遺跡見学記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9794

バイア海底遺跡見学記

野上建紀（有田町歴史民俗資料館）
ダニエレ・ペトレッラ（ANA, Italy）

はじめに

バイア水中公園（Il Parco Sommerso di Baia, Baia Underwater Park）は、緩慢地動 bradyseism によってローマ時代の都市が海に没した遺跡（バイア海底遺跡）を公園化したものである。海底遺跡の一般公開に関しては最も先進的な例のひとつである。2007 年 11 月 7・8 日、現地でバイア海底遺跡の調査や整備に携わっているニコラ・セベリーノ氏の御厚意により見学することができたので報告する。

1　バイア海底遺跡の概要と略史

バイア海底遺跡はナポリの中心市街から西へ海岸線沿いに 15km ほど離れた位置にある。バイアの城跡からは紀元 79 年にポンペイやエルコラーノの時間を止めたベスビオ山を遠くに望むことができる。海底遺跡は現在のバイア港からポッツォーリの Pontile della Pirelli までの海岸付近一帯に広がっている。バイアの古代都市と、ローマ時代の波止場と倉庫として使用された無数の建造物からなる Portus lulius の遺跡である。

バイアは紀元前２世紀から鉱泉が開発されたことが知られており、温暖な気候で風光明媚な海岸の町として有名であり、紀元３世紀の終わりまでローマの貴族階級や皇帝一族の最も人気のあるリゾート地であった。しかし、４世紀の終わり頃から緩やかな地盤沈下の兆候が現れ、海岸が沈下するのに伴い、海岸部の邸宅は放棄されていき、海に没していった。

1969 年、２体の大理石像がバイアのプンタ・エピタフィオ Punta Epitaffio の海底で発見された。頭部はすでに侵食されて形をとどめていなかったが、盲目のポリュフェモス Polyphemus の有名な神話の二人の主人公の像と確認できるものであった。

Figure 1　バイア水中公園位置図（Google map）

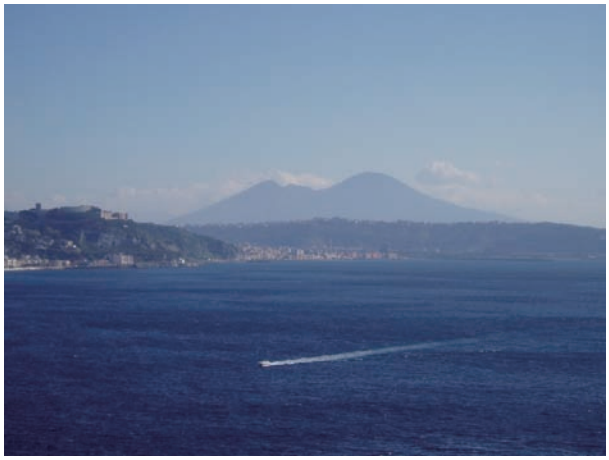

Figure 2　バイア城よりベスビオ山を遠望

Figure 3　バイア城より見たバイア海底遺跡の海域

Figure 4　ローマ時代のバイア付近の復元図

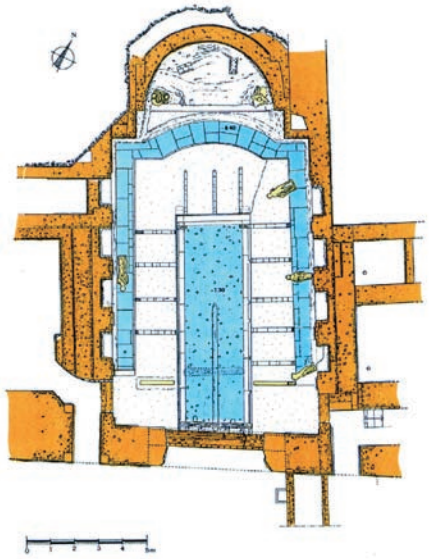

Figure ５（上）　クラウディウス帝のニンファエウム模型
Figure ６（右）　ニンファエウム遺構実測図（Miniero 2003）

そして、1980 年代に入り、海底の発掘調査が行われ、後陣 apse を伴う大きな長方形の建造物が現れた。ニンファエウム Nymphaeum としてデザインされたトリクリニウム triclinium（宴席部屋）と思われるものであった。1969 年に発見された２体の像がこの後陣にかつて立っていたことも明らかとなった。以後、発掘調査が継続して行われている。また、近年ではマルチビーム測深により海底遺跡地図が作成されており、あたかも航空写真のように海底遺跡を俯瞰することができる。

２　バイア海底遺跡の整備内容

①水中公園の創設

バイア海底遺跡はナポリ湾のポシッリポ Posillipo にあるガイオラ Gaiola 海底遺跡とともにイタリア環境省によって、水中公園として 2002 年８月７日に創設された。水中公園創設の目的をパンフレットから抜き出してみる。以下の通りである。

１）環境と遺跡の保護

２）地域の海洋生物や水中考古学遺産の知識の普及

３）生態学、海洋生物学、考古学の分野における一般教養を向上させるための教育的プログラム

４）地域の知識や調査を広げるための科学的プログラム

５）伝統的な地域活動やすでに行われている地域住民や団体の活動に基づいた社会経済的な発展との調和の促進

そして、これらの目的のために、規制表示の設置（海上ブイや海岸上の目印）、公園事務所の開設（バイア城内）、イタリア語や英語のリーフレットの作成、ウェブサイトの開設（www.areamarinaprotettabaia.it）、道路案内サインや訪問者案内サインの設置などが行われている。

②遺跡の保護ゾーン

遺跡の整備と活用はその保存が前提となる。バイア海底遺跡では A（total reserve）、B（general reserve）、C（partial reserve）の３つのゾーンに分けられている。ゾーンの境界にはブイ等が設置してあり、海面あるいは陸上から容易に認識できる。最も規制が厳しい A ゾーンは許可なく行える行為はほとんどない。水泳も禁止である。船のアンカリングや航行はもちろんのこと漕ぎボートによる横断も禁止されている。制限付きで許可されている行為はダイビングと岸からの釣りなどである。B ゾーンは水泳、ダイビング、漕ぎボートによる移動が許可されている。C ゾーンは無条件に許可されている行為は B ゾーンと変わりないが、船のアンカリングや航行、停泊が条件付きで許可されている。

③遺物や遺構の保護措置

遺物は大理石像、ガラス製品、アンフォラなどの土器など多数に上るが、出土した遺物の多くは回収されて後述するバイア城内の考古学博物館に収蔵・展示されている。

遺構の主な材質は石、レンガや漆喰などである。何も手を加えないことを原則としている。石やレンガな

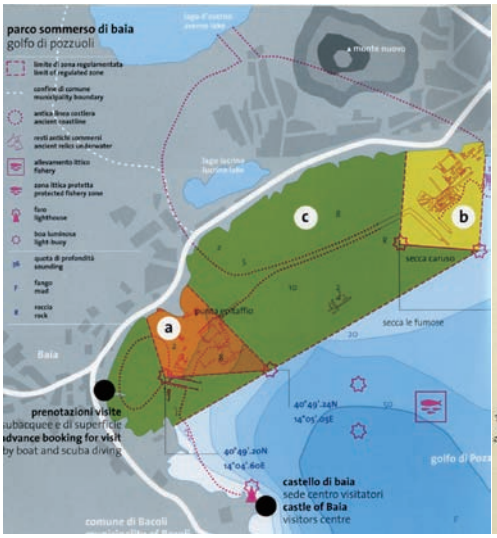

Figure 7　バイア水中公園の保護ゾーン
(Courtesy: Baia Underwater Park)

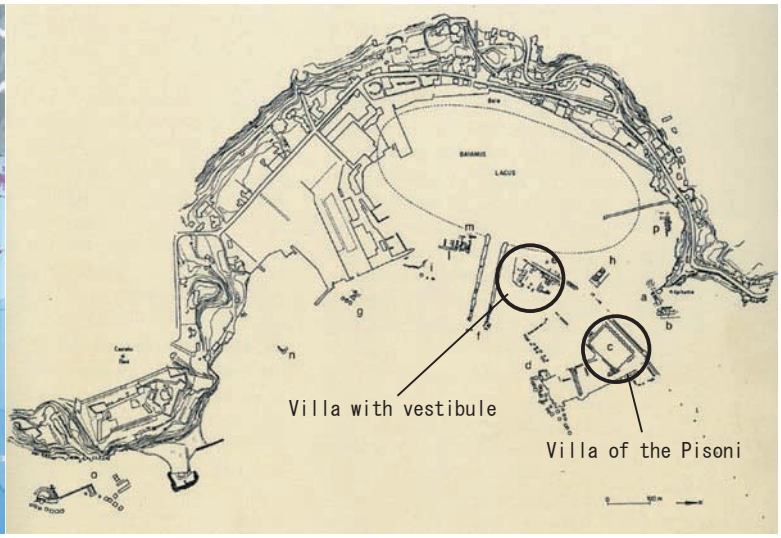

Figure 8　バイア海底遺跡遺構配置図（Miniero 2003）

Figure 9　バイア水中公園の見学船

Figure 10　波止場にあるダイビングセンター

どは海中でも比較的変化がないが、漆喰はかなり脆くなっているように見受けられた。モザイク装飾が残る床については、一部に３枚の合わせガラスを被せ、その上を土嚢で押さえて保護していた。その部分だけはガラスを持ち上げればモザイク床を見学することができる。その他の部分は白砂によって覆われている。ガラスではなく、厚いフェルト状の布を被せ、土嚢で押さえている箇所もあった。

バイア海底遺跡では遺物はもちろんのこと動植物の採取も許されていない。そのため遺構に付着した海藻であっても原則として除去しない。将来、仮に遺構に動植物とくに植物が影響を与えるようなことになれば、選択的に何らかの措置をとらなくてはならないであろう。

④遺跡の見学方法

バイア水中公園の管理はバイア城内にある公園事務所が行っているが、別にダイビングセンター（prenotazioni viste subacquee e di superficie, advance booking for visit by boat and scuba diving）が港の波止場に設けられている。ダイビング器材の管理、空気の充填などはここで行われ、シャワールームや更衣室等も完備されている。

遺跡の見学方法は大きく分けて、グラスボトムボートで見学する方法、専門ダイバーが撮影する映像を見学船上のモニターで見学する方法、スキューバ・ダイビングで見学する方法の３通りである。グラスボトムボートとは船底にガラス窓が設けられた船であり、窓越しに海底の遺跡を見学することができるものである。

スキューバ・ダイビングによる見学コースは「Villa with vestibule」コースと「Villa of the Pisoni」コー

Figure 11　Villa with vestibule 見学順路
(Courtesy: Baia Underwater Park)

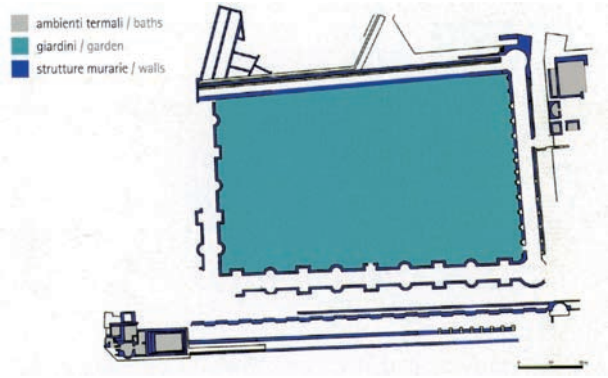

Figure 14　Villa of the Pisoni 遺構実測図
(Courtesy: Baia Underwater Park)

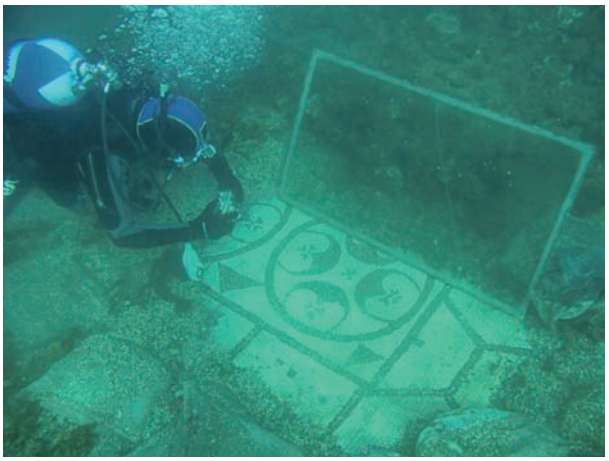

Figure 12　Villa with vestibule コースにあるモザイク床

Figure 15　Villa of the Pisoni 説明板

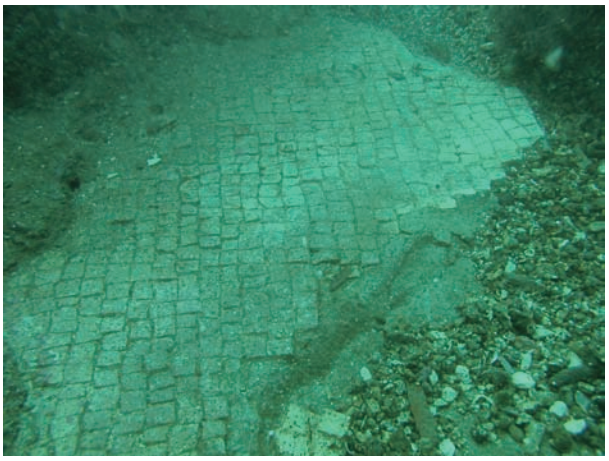

Figure 13　Villa with vestibule コースにある床

Figure 16　Villa of the Pisoni の柱

スがある。「Villa with vestibule」コースは運河の北側の邸宅や公衆浴場を主に見学するコースである。メインストリートに沿って進むと公衆浴場がある。さらに進めば tabernae とよんでいる小さな建物群がある。当時、店主が商品を並べ、通行人に売っていた店である。少し先に進むと石のベンチの両脇に２本の柱をもつ入口がある。内部に入ると中央のアトリウム atrium の周りに小部屋があり、美しいモザイク床を見ることができる。一方、「Villa of the Pisoni」コースはピソニ Pisoni の邸宅を中心に見学するコースである。約 100m × 60m の大きな庭園の周囲ではレンガ積みの円柱や石積みの壁を見ることができる。

海底遺跡には各所に半恒久的な説明板が設置されている。カラーの図面と説明をアクリル板が覆っている。

貝などの付着物によってアクリル板が覆われているが、コテ状の金具でアクリル板上を削り取ると、説明が見える。定期的な除去が必要なようである。説明板には番号が記されてあり、遺跡全体の中での現在地がわかるようになっている。

その他、レプリカの設置や新たな説明板の設置などの整備は現在も行われている。海底のニンファエウムには出土した大理石像のレプリカを設置するという。現在の整備計画は2008年7月に完了する予定である。

⑤バイア海底遺跡の潜水環境

ごく限られた体験であるが、筆者らが体験した潜水環境について述べる。当初、7日に潜水見学する予定であったが、天候は晴れているものの、風が強く、白波が立っていた。また、前夜の雨の影響か透明度は1m程度であり、翌日に延期となった。8日は天候にも海況にも恵まれ、透明度も10ー15mはあったと思う。条件が揃えば20mは見えるという。筆者らは最初に「Villa with vestibule」コースを見学し、次に水中移動して「Villa of the Pisoni」コースを見学した。そして、さらに現在、発掘調査中のローマ時代の石畳の道路付近を見学した。潜水時間は午前10時05分から11時26分の81分間であった。最大水深5.4m、平均水深3.3mであった。水深が浅いため、海底でも波の影響やうねりを感じる。底質について、遺構面は石などが敷き詰められている部分が多いが、その上を白色の砂が覆っている。水温は11月上旬で摂氏19度であったが、比較的水中での移動が多かったためか、5mmのウェットスーツとフード付インナーで寒く感じることはなかった。

3 バイア海底遺跡の周辺

①バイア城 Castello di Baia, Castle of Baia

バイア海底遺跡の南側の岬状の突端に聳えている古城がバイア城である。ローマ時代の遺跡の上に築かれており、城の修復の際にはローマ時代の水道やモザイク床なども見ることができる。バイア海底遺跡の出土遺物はバイア城の内部を利用した考古学博物館（museo archeologico dei campi flegrei castello di baia）に展示されている。

博物館の展示のメインのニンファエウムはバイア海底遺跡の海底の状況をイメージしたものである。長方

Figure 17 石畳の道路とDr. Nicola Severino

Figure 18 バイア城

Figure 19 バイア城考古学博物館内のニンファエウムの展示

Figure 20 バイア考古公園

Figure 21 ローマ時代の遺跡上に建てられた住居

形の平面プランにアーチ形の屋根がかかる。後陣には神話の主人公の大理石像が並び、床の中央にはプールがあり、その周囲を寝台が取り囲んでいる。プールに料理を浮かべて宴会が催されていたという。ニンファエウムの展示の周囲の展示ケースには海底遺跡から出土した土器などが展示されている。

屋外に出るとバイア海底遺跡はもちろんベスビオ山まで一望でき、全体の環境を把握することができる。バイア海底遺跡に関する各種パンフレットや書籍等はバイア城入口のミュージアムショップで販売している。前に述べたようにバイア水中公園の公園事務所もバイア城内にあり、バイア海底遺跡を見学するにあたっては最初に訪れるべき場所である。

②バイア考古公園 Parco Archeologico di Baia

バイアの遺跡の全てが海に没したわけではなく、陸地にも数多くの遺構が残り、バイア考古公園（Parco Archeologico di Baia）として整備されている。広大な敷地の考古公園では紀元前２世紀から紀元４世紀頃までの浴場跡や劇場などの建造物や道路の遺構が数多く残っている。バイア海底遺跡と共通の構造物があるので、事前にバイア考古公園の遺跡を見学し、学習することによって、海底遺跡の遺構の意味をより正確に深く理解することができる。

おわりに

バイア海底遺跡は現在も発掘調査中である。今回の見学時にも水中ドレッジによる発掘調査が行われていた。セベリーノ氏は私の手をとり、吸入口にもっていき、その吸引力を体験させてくれた。それほど強いものではなかった。その掘り土がパイプより排出されていた。それらの掘り土よりセベリーノ氏は金属製品を回収した。私にも掘り土の中から遺物を探すように促した。私自身は遺物を拾ってよいものか少し戸惑いながらアンフォラの把手を見つけ、回収した。はるばる訪ねてきた私への温かい心尽くしであった。

最後に今回、私に同行してくれた共同報告者のダニエレ・ペトレッラ氏について紹介しておきたい。彼はイタリアのANA(Associazione Nazionale Archeologi)の理事を務めている考古学者であり、水中遺跡の調査にも携わっている。今回の見学以前にバイア海底遺跡にもすでに潜水している。また、2007年10月から11月初めにかけて一ヶ月にわたり、長崎県松浦市鷹島海底遺跡の出土遺物の調査を行っている。来年、再び来日し、日本の海底遺跡の調査を一緒に行う予定である。今後、日本とイタリアの水中考古学の交流を図りたいと考えている。（文責　野上）

謝意 Special thanks

Dott. Nicola Severino ニコラ・セベリーノ、Dott. Giovanni Borriello ジョバンニ・ボッリエロ、Dott. Tsao Cevoli ツァオ・セボリ、Dott.ssa Stefania D'Amato ステファニア・ダマト、Dott.ssa Lidia Vignola リディア・ヴィグノラ、Dott.ssa Simona Salmieri シモーナ・サルミエリ

Paola Miniero (ed.) 2000. the archaeological of the phlegrean fields in the castle of baia

Paola Miniero (ed.) 2003. baia the castle, museum and archaeological sites